

稽古から見た舞踏

—大野一雄の場合—

お茶の水女子大学大学院修士課程2年
相原朋枝

舞踏の創始者であり、国際的に活躍している大野一雄のもとには、舞踏を志す多くの‘研究生’が国内外から集まる。週二回、二時間の稽古は大野が舞踏を語ることに始まり、そこで示されるテーマに対し研究生が各々の方法で即興のダンスを重ねて終わる。特定のダンス・テクニクが示される事はなく、テーマを「テクニクではなく」「フリースタイルで」「でたための限りを尽くして体験し」「自分で探して」¹⁾踊ることが求められる。稽古の大半は各人に任された即興で進められるが、「こういうかたちでやった方がいいと思いますから」と‘かたち’に言及するテーマとして「美しい花を見て歩く」がある。大野はこのテーマの‘かたち’と‘思い’を語りつつ実際に歩いて見せ、時には研究生が歩く中を見て回り体に触れ気付きを助けることを行う。

【研究目的及び方法】

大野の稽古に言及した研究は幾つか挙げられる^{*}。本研究は一つの試みとして稽古記録及び録音テープより‘歩く’に関する大野の発言(1995年4月～11月)を抽出し検討してゆく。なお筆者は1992年より稽古の参加を始めている。

【結果及び考察】

‘歩く’に関する発言は‘思い’と‘かたち’に分けられる。

① ‘思い’—‘歩く’における基本理念
<花にひかれて歩く>

テーマは「花にひかれて歩く」と示される。美しい花を見て「いつのまにか、花の美しさにひかれて、花のところへ寄っていくわけです」「花が美しいなあ」という花への思い、花のあまりの美しさにひかれて「まるで心のなかの生き物がすーっと手を出すように」「いつのまにか手がすーっと出るように」思わず足が出る。花の方へ思わず歩く。「花」は時に「桜」とされる。

<魂が先行して肉体がついていく>

大野は踊りで「魂の奥底」「命のもと」に触れることが最も大切だ、と繰り返し語る。「歩く」においても「命が前に進もうとしている」「肉体が先になってじゃない」「魂にひかれて」「命と命が触れ合うように」「進むのは命が進む」と「魂」「命」が強調される。「魂が先行して肉体がついていく、こうでなくては絶対駄目だ」の発言も得られた。

② ‘かたち’—‘歩く’における身体のあり方
<状態>

「上半身楽に」「手を柔らかく」「無駄な力を抜いてすーっと」「やわらかくゆっくり大きく」「開放して」以上のような力まない状態が求められる。また「肋骨を開かない」「胸を前に出さない」「胸を張らないで引いて」「顎を上げない」「おなかをひいて」と語られる。その理由は、胸を張って「威張らなくていいでしょう」「胸を張っているのは命は探せない」と述べられる。

<体を伸ばす—重心が前にかかる—一足が出る>

「背骨から頭のてっぺんにかけてできるだけ上のほうに」「すーっとのばして」「できるだけ背は高く」この状態で「前に少し傾けて」「重心をふっとかけるから前にすーっといく」「自分で行かないで、重心がかかって」「足を少し前に出すともう前のほうにすーっとでてくるような」「前のほうに足からでなく上体からできるように」「足がひとりでについてくる」以上のように足は‘出す’のではなく‘出る’。またこれらのことは「天の恵みが入ってきて天にのびて花が咲く」「花が天にのびようとして咲く」ことと同じように「前に進みたいから傾く」「天にのびて 天からの恵みを受けてすーっといく」「こうして命を探している」とも語られる。

<目>

目に関しては多くの発言があり、その一部として「目は前に進むのだからすーっと前のほうに」「目はちゃんと開ける いつでも開ける」「目はただ開けて 全てを受け入れる」「全身が目となる」「目、手、足全部一緒に動く 目だけではない」「きよろきよろしない、じーっと定める」「ものを見ない目」「踊りの目と日常の目を分ける」「目を必死になって」がある。

さらに上記のことを「自分で探していく 目、体重のかけかたはどうか」「自分で確かめる」「自分でどうしたらよいか必死になって探す」「体験する 教えられるのを待っているはだめ」と研究生が独力で掴むことが強調される。

【まとめ】

からだの中に花への‘思い’が満ちゆき、‘思い’がこぼれ落ちるがごとく足が一步、また一步と出る。表面的な身体動作を超え、又‘かたち’をも超えるものを実現することが課題であると捉えることができる。

1) 本文中鍵括弧(「」)内は全て筆者の記録テープ(1995年)から採取した大野の発言である。
*発表資料参照。筆者が編集作業に一部関わったものに『大野一雄稽古の言葉』(大野一雄舞踏研究所編1997年フィルムアート社)がある。